

2025

春日大社 芸術祭

2025.11.8 (土) - 11.10 (月)

春日大社 感謝・共生の館

実施報告書

1 開催地 奈良

国民みらい出版はこれまで、芸術や文化、社会貢献の架け橋としてさまざまな活動を行ってまいりました。2025 年は、日本の環境保護の源泉となる春日山原始林の特別天然記念物に制定から 70 周年となります。そこで我々は、開催にあたって主題を「自然との共生」に決めました。自然とともに生き、文化を育んできた奈良。この地は日本人の持つ自然や人との関わり方を象徴する場にふさわしい場所です。なかでも奈良を代表する神域・春日大社の「感謝・共生の館」での開催は、国内外からの多くの来場者に深い印象を与える舞台となりました。

2 開催レポート

公式参拝と開幕行事

会期初日の午後には、春日大社にて公式参拝行事を執り行いました。ご出展者さまのご健勝と活動のご発展を祈願した後、玉串奉納が厳かに実施されました。実行委員会を代表して正岡明氏が、芸術文化への思いや本芸術祭の理念について挨拶を行い、厳粛な空気の中、列席された皆さまは改めて「自然とともに生きる」ことに向き合われました。

多彩な展示作品について

今回の古都芸術祭では、およそ 80 もの幅広い創作ジャンルの作品が展示されました。作品の多くに「自然」や「文化の継承」といった視点が織り込まれていました。

近年、われわれは未来を担う子どもたちの感性を育む活動として、会場近隣の子どもたちによる絵画展示を恒例の企画として実施しています。今年は「奈良カトリック幼稚園」の子どもたちの絵画作品を紹介いたしました。さらに「墨の産地奈良で書を学ぶ青少年」による書道作品も初めて展示しました。

さらに本展では、樹木とともに育まれてきた文化を再認識し、後世へ継承していくことにも取り組みました。奈良が誇る吉野杉は、500 年以上の歴史を持つ日本の林業の原点ともいえます。文化の歩みに欠かせない木材は、建築材だけでなく、紙や墨の原料としても日本の文化を支えてきました。すぐれた詩歌・文学作品の展示物を、強く美しい吉野杉を用いて制作することで会場を彩りました。

貴重資料による特別展示

本展実行委員である正岡明氏は、正岡子規の家系を継ぎ、子規をはじめとする祖先の遺品を守るとともに、その功績を顕彰するため講演や文筆活動を行ってきました。本展では、そうした活動の一端として、正岡氏所蔵の資料を特別展示するとともに、氏自ら展示物の解説を行いました。特別展示には、正岡子規の直筆書、子規の叔父でベルギー大使や松山市長を務めた加藤拓川が赴任先で受章した勲章、さらに子規や拓川宛の明治期の貴重な書簡などが含まれ、参加者は文学史と個人史が交錯する奥深い世界に触れることができました。

来場状況と会場の雰囲気

会場は、春日大社特有の清浄な空気と樹々の息づかいに包まれ、アーティストの作品が自然ととけ合う、非常に心地よい空間が形成されました。

秋の行楽シーズン最盛期だったため、期間中は国内外から多くの来場者が訪れました。特に、晴天に恵まれた初日はにぎわい、多様な作品群のひとつひとつにじっくりと向き合う来場者の姿があちこちにありました。2 日目は雨天でしたが、落ち着いた静けさの中で作品を味わう方も多く見られ、天候ごとに異なる雰囲気を楽しめる三日間となりました。

皆さまが出展作のクオリティと奥行きに驚きの表情を浮かべ、自然への敬意や作者の想いに感銘を受けている面持ちの方も多く見られました。さらに、宮司さま、巫女さまも神事の合間をぬってご来場くださいました。

また、子どもたちのいきいきとした表現には「心が洗われる」「温かい気持ちになった」という笑顔が見られました。吉野杉を用いた詩歌・文学の展示物からは、卓越した文学作品がもつ人生の重みと木材の香りや温もりが響きあい、来場者へ古からの日本の文化に思いを馳せる機会を与えました。



3 開催概要

2025 古都芸術祭 春日大社

会 期	2025 年 11 月 8 日（土）～ 10 日（月）
開催時間	10:00 ～ 17:00（最終日は 14:00 まで）
会 場	春日大社 感謝・共生の館
展 示	下記参照
入 場 料	無料
主 催	2025 古都芸術祭 実行委員会
企画運営	株式会社国民みらい出版
後 援	奈良県、奈良県教育委員会、毎日新聞奈良支局、奈良テレビ放送
広報活動	マスコミ各社にプレスリリースを配布



4 展示構成

絵画および平面作品

3D アート、アクリル画、アルコールインクアート、色鉛筆画、ウッドバーニング、鉛筆画
オイルパステル画、オリジナルレジンアート、絹糸仏画アート、グラフィックデザイン、消しゴム版画、再生肉筆画、写真、書道、書道・スパークリッシュラメアート、神聖幾何学ハレアート、水彩画、墨アート、デジタルアート、点描曼荼羅、日本画、パステルアート、パステル画、ヒーリングアート、一筆龍、筆文字、フレームアート、ペン画、ボールペン画、ボタニーコラージュアート、ボタニーペインティング、ボタニカルアート、曼荼羅アート、曼荼羅画、ミクストメディア、焼絵、油彩画、龍字画アート、和紙ちぎり絵（分野五十音順）

立体および工芸作品

アーティフィシャルフラワー、アートフリーレースコラージュ、一閑張り、エポキシアート、オートクチュールバッグ、押し花、おりがみアート、刺繍、染色、創作切り絵（古紙による再生アート）、大麻飾り、タティングレース、タティングレース・結美曼荼羅、苔アート、つまみ細工、蔓工芸、デコパージュ（マーブリング）、籐工芸、陶人形、トールペイント、フラワーアレンジメント、プリザーブドフラワー、平面工芸、水引細工（水引ジュエリー）、麦わら細工、羊毛フェルトアート、立体コラージュ／ミクストメディアアート、立体造形（分野五十音順）

文学作品

エッセイ、絵本・イラスト、現代詩、作詞、短歌、哲学、ノンフィクション文学、俳句（分野五十音順）

●その他の展示物

- ①奈良カトリックの子どもたちの絵、墨の産地奈良で書道を学ぶ青少年の作品
- ②正岡子規研究所特別展示・正岡子規および子規を支えた人々の遺品や書簡

5 総括 ～自然を愛する心がつなぐ芸術祭～

本芸術祭が、参加者・来場者の皆さまに新たな気づきや出会いをもたらす場となり、伝統文化と現代芸術の架け橋として、今後さらに発展していくことを願っております。会場では、多様な立場や生き方、そして幅広い創作ジャンルの方々が、「自然を愛する心」という共通の理想のもとにつながり合う姿がありました。これは、まさに本展の理念が体现された瞬間でもありました。

出展者の皆さまに、深く感謝申し上げます。皆さま一人ひとりの創作が本芸術祭に豊かな広がりとお行きをもたらし、多くの来場者に感動と新たな視点を届けてくださいました。今後も自由で実りある創作活動を続けられ、さらなる可能性を切り拓いていかれますことを、心より祈念しております。

公式参拝時のご挨拶 正岡子規研究所主宰・正岡明

ようこそ奈良にお越しくださいました。皆さまにお会いできますことを心より楽しみにしておりました。春日の森もこのところ急に秋の色を深め、いよいよ季節の移ろいを感じる頃となりました。

さて、今回は「アートによって環境保護の大切さを発信する」という趣旨で開催されています。ご存じの通り、春日山原始林は「百年斧を入れず」といわれ、平安時代から 1250 年以上に渡り、ほとんど人の手が入らず守り継がれてきた“神の森”であり、春日大社の鎮守の森として大切にされてきました。一粒の種が太陽と水の恵みを受けて大木に育ち、やがて倒れ朽ち、土に還って次の世代を育てるという、完全な自然の循環が続いています。人間社会では到底成し得ない壮大な営みです。

この森は世界遺産に登録されていますが、広大な自然林でありながら「自然遺産」ではなく「文化遺産」とされています。それは、古来より人々が“神の森”として崇め、大切に守ってきたという、深い文化的関わりが評価されたためでしょう。私はここ十数年、NHK 文化教室などで「樹木医と歩く春日原始林」を担当し、感動的な老木や自然が見せる神秘に数多く触れてきました。皆さまにも機会があれば、ぜひこの森をご案内したいと思っております。

一方、私は不思議なご縁から正岡子規の子孫として生まれました。子規は明治 28 年、28 歳の時に日清戦争の従軍記者として中国に渡り、その帰途に故郷・松山へ立ち寄りしました。その頃、親友の夏目漱石が松山中学校の教師として赴任しており、小説「坊っちゃん」の舞台にもなった松山中学へ 50 日あまり転がり込んでいたと伝わっています。友人を呼び集め、うな井を注文しては漱石につけを回すなど、ずいぶんと気ままに過ごしたようです。さらに子規は東京へ戻る際、漱石から 10 円（現在の 10 ～ 20 万円ほど）を借り、気が大きくなったまま奈良へ立ち寄り、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の句を詠みました。ほかにも「ともしびや鹿鳴くあとの神の杜」など、春日の森を詠んだ句を残しています。

今回、会場内のガラスケースには、奈良の大仏などを題材に詠んだ子規直筆の短歌軸五首も展示しております。ぜひご覧いただければ幸いです。

本日はご来臨まことにありがとうございました。





